戦艦大和の生まれた街

軍港・軍事都市の名残　呉

かつての東洋一の海軍基地の跡地には、海上自衛隊と造船所がある。左のドックで戦艦大和が建造された。

その階段を上から覗くと足がすくむ。

馬の背のようにむくりのついた急階段、手摺がなければとても下れない。上り下りするのも大変だが、よくぞ工事をしたものだと半ば呆れてしまう。

明治19年、呉に海軍鎮守府がおかれることになり、瀬戸内の寒村が、東洋一の軍港・軍事都市として歩みを始めます。

日本海軍の一大拠点として、艦隊兵員から内務従業員、海軍工廠等の軍需施設から下請工場の従業員、そしてその家族まで、多数の人達が狭い平野にひしめきました。

一方を瀬戸内海に、三方を小高い山に囲まれた狭い平地には、終戦間近になると学徒や徴用工などの動員もあり、一時的とはいえ50万近い人が居を構えたそうです。

平地だけでは到底まかなうことは出来ず、三方の小高い山々の斜面に市街地が広がりました。
市街地北斜面の両城地区には、その名残が色濃く残っています。

高齢の方が、両手に買い物袋を抱えて、急階段を上って行く姿を見ました。その先に自宅があるようです。

階段下に止めてあったバイクの持ち主は、その先に見える家屋の住人なのかも知れません。

まちあるきの考古学

戦艦大和に想う

戦時中の主要軍港は、横須賀、佐世保、そして呉でした。
横須賀や佐世保に比べて、呉の街の雰囲気は少し違うように感じます。それは米軍基地の有無が影響しているようです。

横須賀や佐世保の市街地には、広大な米軍基地が港町の狭い平地に広がっています。
繁華街にはアメリカナイズされた一角があり、バー、アメリカ雑貨店、バーガーショップ等が点在して、街を印象づけています。

しかし、呉にはそれがなく、街並みに特長がありません。

大和は後ろ姿も美しい

呉を知らない日本人は多いが、大和を知らない日本人はいません。
その響きは、日本人にとって、どこか悲劇のヒーローを連想させます。

当時、世界最高峰の技術を結集した世界一の巨大戦艦 「大和」。
呉の海軍工廠で建造され、呉を母港にした連合艦隊の旗艦。
しかし、長い歳月の末に竣工した時、大和はすでに時代遅れでした。
海戦の主役は、巨砲を搭載した戦艦から空母に移っていたのです。
戦争末期、無用の長物と化した巨艦は、沖縄戦への特攻作戦に投入されます。米軍の猛攻を受け、2,700人の乗組員とともに大和は海の藻屑と消えました。

2199年、ガミラス帝国の攻撃を受けた瀕死の地球を救うため、戦艦「大和」は宇宙戦艦「ヤマト」と名を変え、14万8,000光年離れたイスカンダル星に向けた航海に出発します。
その姿は、日本人のもつ戦艦大和のイメージそのものでした。
イスカンダル星への苦難の旅路は、大和を日本人にとってのヒーローに昇華させました。

呉の人気観光施設「大和記念館」には、1/10スケールの模型が展示されています。
その姿に、素直に「美しい」と感じます。　宙も飛ぶかも知れない、と。
戦争兵器をデザイン優先で設計した訳はなく、「機能」と「構造」を極限まで追求したものは、美しい、ということのようです。その美しさを感じるためだけに、記念館に行く価値はあります。

日本人にとっての「大和」の記憶が、呉の街の歴史的資産なのかも知れません。

戦前の呉市街地図（下図）
海軍基地は軍事機密のため、白地で塗りつぶされました。呉市街地に占める海軍施設の大きさが分かります。